

某大学の学生が行方不明になった。大学は春休みに入っていたが、所属していたサークルの合宿にその学生は来なかった。合宿の参加費も払っていたのに、参加しないのは変だというわけで部員がその学生に連絡を取ろうとしたが、取れない。実家にも帰っていないという。学生は合宿の一週間ほど前に旅行に行くと言いつつ友人に言い残し出て行ったきりだという。

若者が時々とる暗い道を選択してしまったのかもしれない。そう考え彼の友人たちは心配した。

彼の友人がそういうことを心配したのも無理は無い。彼には以前からそういう兆候があった。彼は理系だったが、シヨウペンハウエルの自殺論なんかを読んでいたりと、尊敬する文豪は太宰治ということなどがその推測を強く後押ししていた。

それにしても、少し辻褃が合わない。そういう言うなればアクの強い人間が、暗い道、つまりは自殺をするとしたら、ちゃんと後で発見してもらいたいのが、普通である。自殺というのは、生きるのが難しいというのも理由の一つだが、むしろ若者の自殺というと、世の中への反感や、憤り、不満、そういったものを表す最後の手段という要素が強いものだ。大学に不満があるなら、飛び降り自殺なり、何かしら不満を外の世界に表しながら死ぬ方法はいくらかもある。

だが実際には、その学生の家からは遺書みたいなものも出てこなかったし、友人にも特に何も言っていないかった。三日ほどぶらついたら帰ってくる、というようなことさえ言っていたという。さらには、実際に旅行に出た最初の何日かに至っては、携帯から自身のホームページにいつもと変わらないような日記を書いていたぐらいである。しかも、その内容は明るく、「久しぶりに気持ちがほくほくしている」とさえ言っている。

それで、いよいよ彼は自殺はしてない、何かの事件に巻き込まれたという見解に至った。結局、彼は行方不明ということで、捜索願が出された。

日本の大学生のうち何人が満足しているのだろうか。ちょっとオレには分からない。別に調べてみる気も起きない。調べてみたって何を基準にその人間が満足しているかなんて判断できっこないんだろう。少なくともオレの周りの大学の人間を、かなり満足してるやつを濃い赤色、大いに不満を持つてるやつを濃い緑色に色分けしてみようと思っても、なかなか色分けも進まないだろう。

なんとなく色分けできそうならいいやつは、きっとだいたい緑よりの色か、赤と緑の混ざった汚い色になりそう。友人でも色分けできないやつもいるし、いつもサークルで隣に来るメグミちゃんが赤なのか、緑なのか、実際のところは分からない。とりあえず、赤いパンツを時々はいているのだけはこっそり知っている。

誰だって、実際のところ深い緑なのかもしれないけど、だれもうつ病扱いなんてされたくない。だから、みんなぼちぼちだ、と言う。

オレの周りが病んでいるだけなのか、大学生みんな病んでいるのか。ちょっとそこは分からない。

でも、オレの意見としては、大学生みたいな若いころから、全身真っ赤に色分けできるやつなんてのはちょっと危ない気がする。人生が大して進んでもいない人間が幸福に浸ってるなんて、やっぱり気持ちが悪い。バブルみたいに景気が良けりゃ、未来も明るいし、真っ赤なやつがいたって変じゃないんだが。ちなみに、ヘルメットに学生服の方のアカのやつはいつの時代もいたら困るが。

だからって、何もしないで斜め下を向きながら緑に染まっているわけにも行かない。それで、オレは時々旅に出ることにしてる。一人でぶらぶら。二万円も握り締めておけば、二、三日はゆっくりできる。海外に行こうと思えば、それなりにかかるけど、別に海外に行かなくても、見たことの無い景色なんて、電車で一眠りすれば、すぐに見える。海外なんかに行かないと感動できないやつは感受性に欠けているんだ。オレはそう思う。金持ちが海外に行ったら良い。どうしても、海外じゃないと感じれないものを見るんなら貧乏人も頑張って海外に行くべきだ。

オレは、ただ少し日常と違う空気の中に身を置きたい。それだけだ。海外には行かなくても良い。だから、今も電車に乗っている。

目を覚ますと、車窓からは溪谷が見えた。いや、溪谷というほど大げさなものでもないか。とりあえず、川と夕陽と、その間に背の低い山、それから川沿いに土手が続き、そこを運送屋のトラックが時々ぶいーっと走っている。春もまだ来ないこの季節の夕陽はさほど綺麗でも無い。ただ田舎な雰囲気その景色は全体として良くまとまっていて気持ちが良い。

一番驚いたことといえば、電車じゃ無くなっていたことだ。車体の揺れ方が明らかに電気で走っているものじゃなかった。確かに乗った時には上に電線が通っていたが、今は見えない。位置的には確かに多少都市部から離れるが、一応はそれなりに大きな町とつながる鉄道のはずなのだ。列車というものには時々こういう驚きがある。

ふと、窓の外の川の向こうに赤い大きな建物が見え、それから少しすると駅に着いた。知らない駅ではあったが、実際のところ、オレはそこがどの辺かぐらいは知っていた。鉄道オタクじゃないにせよ、一人用テントと寝袋を背負って、旅をするくらいだ。ある程度の鉄道の位置は分かっている。

その駅で降りることにした。車掌に青春十八切符を見せ、それから、誰もいない改札を通り抜ける。少し離れたところで後ろを振り向き、携帯電話で駅の写真を撮る。

「ああ、良いな。なんてぼかぼかな場所だろう」

寂れた木造の駅に、明らかにそこだけ最近新しくつつけたという感じのする駅名の書かれた看板。そして、一昔前の丸いポスト。四角のシャキーンとしたポストじゃない。円柱だ。昔、海水浴で行ったくたびれた田舎の町で見かけて以来だった。

「一体全体、海外に行くやつらは頭がどうかしてるんだ。日本のほっこりした場所を見て周らないうちに何が海外なものか。インドで新しい価値観を発見する、やつらには、そもそも新しいもクソも、古い価値観さえあるのか怪しいじゃないか。まったくわけの分からん連中だ」

ぶつぶつと独り言をはきながら歩く。今晚の飯は、あそこのうどん屋にしようかしら。あそこのコンビニは多分八時には閉まるあまり便利じゃないコンビニエンスストアだな、買うものは飯の前にも買っとかなくちゃいけない。

「それにしたって、大学の教育者も教育者だ。まったくあいづらもいかん。昔の大学は、それこそオレはまだ生まれてもいなかったけど、もっと向上心があったように聞くぞ。いったいどこから日本の教育は変わったのだろうか……」

独り言はとめどなく続いた。オレはいくつかの真実を知っている。

第一に、電車から降りてきた旅人が延々と独り言を呟きながら、まだ、落ちきらないとは言えども、傾いた夕陽の差す山のほうに向かっているということは非常に奇妙であるということ。

第二に、わざわざ一人でふらふら見知らぬ土地に来て、さらにその土地に安らぎを感じているにも関わらず、ぶつぶつと日常の悪口を重ねるのは野暮であるということ。

そして、第三に、オレの吐く呟きはどんなに正論であっても、決して社会的に評価されず、追い風を受けることはありえないということ。

以上、三つの真実から、オレはやっぱり今やっていること、つまりは辺鄙な土地に来て、心を穏やかにし、聞く人もいない中、ぶつぶつと不平を言いながら、山の方へ歩いているというのは、自分にとって正しいことをしている。そう結論付けることにした。

おそらく、この証明をオレの学科の教師に言ってみたって、丸はもらえないだろう。模範解答には、きつと、『以上の三点より、これは矛盾している。よって、命題、独り言をつぶやくべきではない』が証明された』と背理法を用いた解答が書かれ、パソコンの成績通知画面には『科目 代数学 得点 54 不可 習得単位 0.0』と出るんだろう。0点にはしないのがミソらしい。何にせよ追い風は吹かない。

うどんの上の掻き揚げを眺めながら思った。いや、オレはこのうどんの上に掻き揚げつてのが大好きなのだ。おそらく、寿司や焼肉なんかより好きだ。大学に入って、一人暮らしを始めてから、この自分の好物の安さを本当に感謝した。百円のうどんに、百円の掻き揚げをトッピングする。計二百円。どんなに貧乏でも月に二回は食べる。その気になれば毎日でもだ。ただ、絶対に毎日など食わない。どんなに多くても週に二日ぐらいだ。正確な数は数えていないが、多分間違い無い。多分。

えびに、たまねぎ、あと何だ、分からねえ。ごぼうだったっけ、れんこんだったっけ。何かの根っこみたいなやつだ。料理も少しはすべきなのかもしれない。

何にせよ、その掻き揚げは何かうらやましかった。何でもかしくでもごちゃ混ぜになっているのに、お互いの味を損なわず、美味い。ただ、うらやましかった。

古ぼけたうどん屋の画面の小さい、大きなブラウン管のテレビにはNHKのニュースが流れていた。オレがバイトで行っていた派遣会社が不祥事で営業停止を喰らったらしい。

「おじさん、この掻き揚げは美味いですね」

「ん？ おお、ありがとうな」

普通の掻き揚げを誉められたら、人間はやはりいったん疑問で返してしまうらしい。オレは、お勘定をして、うどん屋を後にした。

三、

その学生のサークルの合宿は何事も無かったように進んだ。心配する人もあった。しかし、それで、合宿が中断することはありえなかった。もしも、部員全員が心配していても合宿は進む。集団とはそういうものだ。

代わりに、彼がたまにバイトをしに行っていた派遣会社は営業停止になった。何でも、労働法の派遣業務に関する項目の何かに違反していたらしい。詳しいことはニュースを見るだけではちゃんと分からないが、用はそこに登録していたバイトたちへの扱いが悪かったということだ。

彼のホームページにベルトコンベアーを十二時間延々とやる仕事についての日記があった。どうやらその派遣会社の仕事らしい。

『本日は、十二時間労働をした。びっくりするほど長かった。』

仕事内容はダイレクトメールの包装だ。正しく言うと、単に機械の見張りだ。機械がガシャガシャと、動いていって、完成したダイレクトメールが出てくる。そのガシャガシャ動くやつに、紙を補充するのだ。ダイレクトメールの中身を。

「この漫画好き？」

不意に休憩中と一緒に行った派遣の女性に声をかけられた。ダイレクトメールの中の勧誘の漫画のことだろう。それは、絶対にだれでも見たことのある通信教育の勧誘で、その中には一緒に漫画が入っている。そのことだ。

「私は好きだったよ。別にそれで買うなんてことは無かったけど。主人公がとても有意義に日々を暮らすじゃない。まあ、毎回同じようなサクセスストーリーだったけどさ。でも、まさに有意義って感じじゃん」

彼女は、マルボロのメンソールに火を点けながらそんなことを言った。確か二十四歳だっけ。前に交通量調査の仕事の時にあったことがある。妹がオレと同年代だって言っていたから印象に残っている。そして、決して美人とはいえないが、オレの好みの目元を持って

いた。

昼からの作業はその人のことばかり考えていて、残りの六時間もあつという間に過ぎて行った。どんどんダイレクトメールが山になっていった。日本中に届けられるのだ。でも、きつと、届けられても九割方は五分と待たずにゴミ箱行きなのだろう。

「私の人生とあの漫画ってどっちのほうが有意義なのかな」

帰りの車中、彼女はぼつりとつぶやいた。僕は何も言えないで、外を見ていた。』

その日記以外にも彼はいくつかその派遣会社の日記を書いていて、どれも、フリーターかニートかが出ていた。その会話の端つこにはやりきれないものがあつた。

しかし、日記の限りだと彼は、どうもその派遣を気に入っていたようである。一種の社会勉強だとも書いていた。ただ、やはり扱いは悪かつたようである。逆にそこを気に入っていたのかもしれない。

合宿は滞りなく終わった。

四、

寒さで、起きた。野宿の常だ。一人用のテントに、寝袋。寝る前は、インスタントのコーヒーをぐつと飲んで暖かさを得る。朝になるとちようど、その熱量が失われてきて、目が覚めるようになっていくのかもしれない。だから、起きて最初にやるのは巻き戻しだ。寝袋から上半身だけを出す。ガスコンロに火を点ける。鉄のカップを乗せる。そうやって、体を起こしていく。時間はいくらでもある。ゆっくりやればいい。どんなにゆっくりやろうとしても、大学に向かう急いだ朝よりも短時間でオレの体は起きてくる。

CDウォークマンをかける。ジャズと、ビートルズみたいな昔の有名な曲と、時々クラシックが混ざっている。何曲入れたんだか忘れた。最近のCDウォークマンはたくさんの曲を一枚のCDにぶち込める。ランダムでその中の一曲が流れてくる。バッハのヴァイオリンパルティータだかが流れてきた。

コンビニの袋からおにぎりを二つ取り出し、食う。掻き揚げみたいにいるんなものは入っていない。一種類の具がど真ん中になつんといふ。何の変哲も無いおにぎり。食ってる

うちに湯がわく。カップにとつてを付けて、インスタントコーヒーをザバザバ入れる。コンビニの袋の中の残りのチョコレートを食べながらそれを飲む。

そこまです。そこまでやれば後はするすると事は流れていく。タバコに火を点け、テントと寝袋をしまい、また歩いていく。

独り言は言わない。必要が無いときには使わなくていい。

昨日列車から見た、赤い大きな建物に行こう。ちなみに、バツハの次は朝からデクスター・ゴードンのどっしりとした黒いオルフェがかかって来て、ちよつと疲れた。

橋を渡る。何の装飾も無い。渡るためだけにあるのだ。写真を一枚撮った。途中、もんぺっていうのだろうか、まさにおばあさんという格好の人とすれ違った。

田舎の人は親切で、すれ違うだけで挨拶をしてくれる、なんて言うのは嘘っぱちで、こちらが挨拶をしなけりや特に何も無い。当たり前だ。同じ日本人で、同じような物流で手に入る同じような食べ物を食っているんだ。テレビもあるし、きつとあったかい便座のトイレだってついている。変わりはない。

外国に旅行に行ったやつの話だと、発展途上国ではみんな向こうから挨拶をしてくれるそう。たしかに、オレたちとは違う場所で育ったものを、全く違う環境で食っている人間たちだ。そういうことも有り得るかもしれない。

「日本人は金になるからなあ」

声には出さなかった。必要の無い時には、必要の無いものは使わないほうがいいのだ。また、夕方にでもふと思いついて、口に出して言えば良い。今は必要ない。

がけ崩れ注意の看板を尻目に歩いていく。

オレの予想だと、多分、あれは本当に赤い建物なんだ。夕陽がきれいな季節ならいざ知らず、今の季節に見え方の加減で赤くないものが赤く見えるなんてのはありえないのだ。

赤いものは赤い。緑のものは緑。

レンガ造りだろうか。ちよつと分からない。でも、観光地でもないこんな場所にあんな大きなレンガ造りの建物があるのだろうか。でも、レンガみたいな色だった。

大学入試の日の朝を思い出す。この季節の朝の道をリュックを背負いふらふら歩く。ほとんど初めてに近い、試験場への道はとても新鮮な感じがして、これからの新しい何かに期待した。とても寒くて、最初は鉛筆がきちんと動かないほどだった。結果は悪くもなか

ったが、決して良くは無かった。それでも、それがオレの実力で、オレは自分の中の最高の力を持って、今の大学にいる。志望校だったのかどうかじゃなくて、オレはあの日にベストを尽くした。

そのときの感情がチラチラ見え隠れする。決して嫌いじゃない。

今を作ったのは過去で、未来を作るのは今だ。その上で昔を思い出す。とても大事で良い事だと思う。

川の土手と山の斜面の間に立つその建物は赤かった。だが、レンガではなかった。錆びた鉄だった。工場の廃墟らしい。その色は確かに近くから見ても、古いレンガの色だった。レンガにも酸化鉄は含まれてははずだ。錆は酸化鉄である。当然といえば当然なのだが、同じ色になる。ただ、強度は明らかにレンガのように強くはなかった。当然のことなのだが、奇妙に感じられた。大きさは学校の体育館ぐらいの面積で、屋根はそれよりも高い。きつと、工場としては小さい方だろうし、オレは当たり前前にこれまでもっとたくさん大きな建物、それこそ大学だつてでかい、そういうものを見てきた。ただ、それでも、この廃墟に対する、「巨大だ」という衝撃は心に残った。廃墟といえば蕨のイメージだが、酸化鉄には蕨は絡まないみたいだ。レンガには絡むが、あれは、酸化鉄が表面についているわけじゃない。組成上酸化鉄が含まれているだけだ。目の前のこれは酸化鉄に周りを覆われている。錆なのだ。錆が傷口に入ったら破傷風になると聞いた事がある。植物も破傷風にかかるのだろうか。

ただ、オレはそれをすばらしい工場だと思った。本当にすばらしい雰囲気を持つものには無駄な説明はいらない。特にボキャブラリーの少ないオレみたいなやつが云々言うことでもない。少ないボキャブラリーしかないオレでも、蛇足という言葉ぐらいは知っている。すばらしい。それ以上でも以下でも無い。ただ、土手の上からそれをぼんやり見ている。

五、

「そろそろ固定の仕事に就かなくちゃね。いつまでもこんなつなぎみたいなこととしてられないから」

女は言った。オレは「頑張ってください」とだけ言った。それが交通量調査のとき。

一カ月後に今度は工場で会った。

「私の人生とこの漫画、どっちが有意義だと思う」

「それはあなたが決めることだ。僕が決めるのは僕の人生が有意義かどうかだけで、その漫画が有意義かどうか分からないし、ましてやあなたの人生までは分からない。僕はそう思います」

仕事で疲れていたせい、オレはそんなことを言った。でも、実際にオレはそう思っていた。ただ、そんなに親しくもない人間に、正直に思ったことを話している自分に驚いた。それは、普段のオレでは有り得ないことだった。その女性に何かしら好意みたいなのが あったからなのかもしれない。

それから、オレは何回かその女性と会った。食事をしたり、カラオケに行ったりした。京子さんとオレは呼んだ。

その時のオレには彼女がいた。それでも、オレは京子さんとよく遊びに行った。京子さんは、なかなかいい仕事が見つからないとよく愚痴をこぼした。そして、その度に抱いて欲しいと願った。オレはその願いに答えた。

良いことだとは思わなかった。ただ、それが悪いことだともオレは思わなかった。不思議なことだ。たしかに、オレは自分の彼女を愛していた。それに京子さんに対しての感情は本来セックスをすべき感情ではなかった。きっと京子さんもそうだったはずだ。だが、セックスをした。セックスの後によく京子さんはお父さんの話をした。

「父はね、わたしに有意義に生きなさいって教えてくれたの。」

父は工場で働いていた。母は早くに死んだ。妹が難産だったの。それで死んじゃった。父は男手一つでよく女二人を育ててくれたと思う。私も妹も父に感謝したし、尊敬した。

それで、わたしは人生を有意義に生きようと思ったの。だから、小さいころからの夢を追いかけることにしたよ。美容師になりたかったの。専門学校に行って、ちゃんと勉強してちゃんと卒業した。妹は今大学で看護の勉強してる。

有意義に聞こえるでしょ。多分、妹は本当に有意義かもしれない。でも、わたしはどう？ せっかく勤めた美容室も人間関係のせいで辞めちゃって、今は派遣よ。ニート、フリーターと同じ。

そう思っていると、わたしはどんどん父の生き方は有意義なのかって思うようになったの。父の仕事は工場よ。毎日毎日、下水をきれいにしてる。自分が使ったわけでもない下水を。

何でかってお金がもらえるからよ。じゃあ、わたしが派遣でする仕事って有意義なの。

父は尊敬してるし、感謝してる。ただ……。

あなたは自分の生き方を有意義だと思う？ 自分の人生が有意義かは自分が決めるんでしょう？」

彼女はこういう時、とても気だるそうで、かつとても真剣な感じがこちらに伝わるような話し方をした。

「有意義だと言うよ。大学は志望校じゃないし、学んでもこともきつと一生使わない。バイトもろくにしないで、親の仕送りに頼っている。学業もそんなにかんばしくない。別に頭が悪いわけじゃないんだけど、あまり学校には行かないからね。家で自分の好きな本を読んだ。かと言って、その読んだ本が役に立つとは限らない。

だけど、オレは有意義って言うよ。本当にそう思っているのかは自分でも分からない。でも、どんなに努力したってオレ以外の人間は本当の意味ではオレを有意義だとは言えないんだ。だから、オレは自分は有意義だと言う。たとえ、本当はそう思っていないなくても」「強いだね」

そう言って、京子さんはよく眠ってしまった。

お互いになぜかそれを悪いとは思わなかった。思えなかったのかもしれない。

六、

工場廃墟の敷地周りには有刺鉄線が張られていた。しかし、それはなんと言う事はなく、すぐに間を越そうと思えば越せれる程度だったが、別に無理をする必要も無い。無理して錆びた有刺鉄線で怪我をするのはごめんだ。

オレがさっきまでいた土手からおりてきたところにあるこの歩道を挟んで、周りは農地である。二月の農地からはそこで作られる作物は連想できない。その農地の少し先に道がある。何メートルほどだろう。五十メートル？ 小学生の時に五十メートル走でスタートからゴールを見たときの感覚に似ている。ただ、それは小学生の時の感覚で、今、小学校の運動場で五十メートル走のスタート位置に立ったら、とても近くに感じるのかもしれない。いや、もしかすると、小学校のグラウンドという場所では、今でも五十メートルという

距離は遠くに感じるものなのかもしれない。何にせよ分からない。メートルというのは分かりにくい。富士山の標高はたしか四千メートルも無くて、オレの自転車はきつと時速20キロぐらいで走る。四千メートルなら十五分くらいなのか。駅までも確か十五分ちよい。(不便なところに家を借りたものだ) 富士山はオレの家から駅までの距離以下なのか。メートルというのはこういうときは役に立たない。小学生の五十メートル走。遠いようで、遠くはないぐらいの距離に道がある。

道は山へと続く。トンネルがあつて、さっきの橋につながる。そういう道は少し高い。建設のことはよく分からないが、少し高いところからの方がトンネルは掘りやすいのかもしれない。

その道と、土手と、山に囲まれた、小学生の五十メートル走。そこに何の作物だか分からないけど畑があつて、赤い廃墟が一人座っている。

工場のまわりを歩くと、有刺鉄線は正門だけで、あとは崩れかかったブロック塀が続き、昔、トラックなんか荷物を出し入れしていたらしい場所についた。赤い建物から五メートルほど置いて、草が茂っている。そこから山の方へと登ると、下りの階段があり、扉が見える。

リュックから軍手を取り出し、中に入っていく。中は真っ暗というほどではないが薄暗い。内側もやはり赤いようだ。時々転がっている何かの部品みたいなものも赤いようだ。

この建物は錆にひれ伏してしまっていた。

上から光が差していた。屋根が崩れ、そこから日光が入って来ている。そこに行くと、植物が生えていた。隣には壊れて落ちて来たらしい屋根の残骸らしきものが転がっている。ただ、その植物だけが錆にひれ伏していなかった。そこ以外はただ赤く、謎の部品が転がっているだけである。花は付いていなかったが、まさに雑草というような背の低い草ではない。ひよろりと細い茎で、多少の背丈もある。オレの腰ぐらいなのか。その周りの地面だけは赤くない。植物は錆を無くすのか、日光が錆を落とすのか。分からない。どちらにせよ、工場の外には一本の蔦すら絡んでいないのに、ここにだけ植物があるというのが気味悪く、だが、それ以上に素直に美しいなど感じた。

二階への階段は、全て壊されているようだ。近所のガキがいたずらで入って事故などを起こさないようにしているのだろう。ぐるりと一周する。やはり赤い謎の部品が転がっているばかりだった。植物のところまで戻ってきて、ハイライトを取り出し火を点ける。

外に出て写真を一枚おさめる。今日の日記にでもはってやろう。携帯電話のカメラを構

えた時に二階に続くはしごに気付いた。

くわえタバコを投げ捨て、もう一度軍手をはめる。赤いはしごは思ったよりも錆のダメージを受けていない。難なく二階に登れ、中に入った。

「動かない方が良い」

太い男の声だった。戦争映画で勇敢な選択をした主人公の親友の兵士は八割方死ぬ。オレは勇敢じゃない選択をした。

「そうだ。言うことを聞いてくれて良かった。手荒な真似はしたくないんだ。言うことさえ聞いてくれれば悪くはない」

ドラマみたいなセリフが、まさに演技みたいな緊張感と共に後ろから来る。悪ふざけなのかは分からない。だが、映画ではその考え方で先走ったマフィアの下っ端の頭が五秒後に吹き飛んだ。おとなしく、かつ冷静に動くべきだろう。

「まずは携帯電話を出すんだ」

「持っていない。旅先では一人でゆっくりしたいから持ってこない主義なんだ」

「じゃあ、さつきは何を使って君は写真を撮っていたんだい？」

「……悪かった」

勇敢だった戦友にも、マフィアの三下になる予定も当面のオレには無い。言われるままにした。

まず、携帯電話を渡す。この前買ったばかりの、デジカメクラスのきれいな写真の取れるやつだ。結構便利で重宝していたが、直ぐに地面にたたきつけられ、謎の部品の仲間入りになった。一年もしたらきちんと赤くなって、何の不自然さも無く、この廃墟の一部に溶け込むだろう。次にポケットの中身のハイライトと、マーベラスのライターが押収された。

「タバコを一本吸わせてくれないか。落ち着きたいんだ」

オレは、まだ後ろの男の靴の先以外の部分を見ていなかった。声の太さ、このプレッシャー、そして、使い古されたブーツらしい靴の先端からは屈強な男が浮かぶ。しかし、もしかするというのもありえる。何の武器も持っていない、元声優の優男。それなら、こいつの胸倉をつかんで新しい携帯を買わせてやれば良い。デジカメもついでに買わせてやればいい。

「良いだろう」

男の方を向き、タバコをもらう。携帯もデジカメも諦めるしか無いようだ。期待通りガ

タイが特別に良いわけではなかった。深い緑色のズボンに、黒のコート、だが、右手の先にはキラリと光るコンバットナイフが握られていた。キラリという形容詞はこういう時のためにあるみたいだ。年齢はオレと同じくらいにも見えるが、見ようによっては三十歳ぐらいにも見える。決して、ジジイとかではない。

若いコンバットナイフを持った謎の男と、読書好きの大学生。映画なら大学生が勝っても話はおもしろそうだが、ここは現実だ。

「ありがとう」

火を点けながら考える。

「おとなしく言うことを聞いたほうが正解だと分かったかな」

「そうみたいだな」

ポケットに突っ込んでいるヘミングウェイの短編集に、サラ金のCMの入ったティッシュ。一万円札と千円札が数枚ずつ、それから銀行のカードやら漫画喫茶のカードが入った財布。次々とズボンが軽くなり、最後にポケットが空になったのを確かめられ、革ジャンとリュックも奪われる。

「上着とリュックは下におかないでくれ。気に入ってるんだ」

「しばらくここにいるんだ。どっちにしろそんな心配はすぐにしなくて良くなる」

しばらくとは、どのくらいなのだろう。長い間この錆の城の中になくちやならないのか。いつになったら帰れるんだ。いや、もしかしたら、夜になって暗くなってからオレを殺すつもりなのか。分からない。とりあえず、温泉街に行くという旅の予定は変更しなくちゃいけないのは間違いない。とにかく、相手がナイフを持っていようが、拳銃を持っていようが、たとえオレの昔の彼女の下着を着けた変質者だとしてもだ、落ち着いて対応するのが一番のようだ。

男はオレの膨らんだグレゴリーのリュックを地面に置く。気のせいかな、そこはほかの場所より赤く見えた。中を探りながら聞いてきた。

「いろいろ入っているな。旅人か。なぜこんなところに……いや、まあ良い。仕事は？」

「学生」

「どこから来た？」

「大阪」

「お前を探してだれかここに来る可能性があるようなやつはいるのか？」

「いるかもしれないし、いないかもしれない」

「どういう事だ？」

「オレは友達が少ない。だが、せいづらは親友だ。きっと心配してくれるだろうが、オレがここにいるなんて分かりっこない。オレでさえ、一時間ほど前はこんなところにいるなど予想できなかった。まさに、事実は小説より奇なり」と教わったほどだ」

「よく分かんが、だれもこの場所を知るやつはいないということの良いんだな」

「そういうことになる」

ただし、偶然オレの友達もここを見つかるかもしれない。何せ事実は小説より奇なりだ。というのは面倒になりそうなので省略した。

リュックの中身が次々と赤い地面に並べられていく。寝袋、テント、カセットコンロに、インスタントコーヒー、小瓶に入ったウイスキーに、小説、懐中電灯。金目の物や、普通の人が欲しがりそうなものは特に無い。果物ナイフと、剃刀だけは男のコートの胸ポケットに入っていた。凶器になると判断したのだろう。

「何が要求なんだ？ オレは大して金は持っていない。必要なものがそのリュックに入ってるならやる。とにかく、オレは錯で破傷風なんかにはなりたくないから早いところここを出たいんだが」

「残念だがすぐには帰れない。確かに、お前の持ち物はここでは使えそうなものがけっこうある。だが、オレは強盗じゃない。お前の道具はお前が使うべきだ。だから、盗るつもりはない。ただ、髭剃りと、りんごの皮むきは我慢してもらおう事になる」

男は持っていたロープでオレの足を縛り始める。

「見たところ、すぐに抵抗する様子も無いが、このロープだけはつけさせてもらう。逃げられて、この場所が警察に知られるとまずいんでな」

「抵抗したら？」

「手荒な事はしたくないと言ったろう？」

無防備な男の頭が見える。黒い髪が耳に少しかかるぐらいだ。そこに向かって拳を落とせば逃げ切れるかもしれない。失敗するかもしれない。周りに人がいる確率は低い。小学生のころの五十メートルは八秒六だった。しかし、あの道の向こうに民家があるかも分からない。畑が続く確率の方が高い。男の手はロープを握り、ベルトにはナイフがある。ギリ、だ。

確率論で動くのは癪だったが、勇敢な兵士になる予定はやはり立たなかった。

「身動きは取れるようにしてやる」

男の言った様に、ロープはギチギチに縛られているわけじゃない。右足と左足の間に十五センチほどのゆとりを持たせた。つまり、歩けるが、走る事はできないという状態である。「オレは追われている。だから、ここに隠れている。そして、お前をこのまま帰すわけにはいかない」

「悪いことをしたわけだ。法律では禁じられている」

「そうだ。悪いかどうかは知らんが、確かにオレは法律で禁じられていることをした」
それで会話は終わった。

七、

男はリュックを背負い右手にギリリだ。オレはその前を歩かされる。ロープのせいで小股でちよこちよこことかっこ悪く歩く。男は別段オレを急がせる気は無いらしく、ただ「右だ」「階段を登れ」だのと行く方向を言うだけである。階段の途中、ガラスの割れた窓から外が見える。やはりだれもない。

だれかいたとして、叫んでみたらどうだろう。うまく行ったら警察が来てくれるかもしれない。そして、この男を逮捕してくれる。だが、警察が来る前にオレは多分携帯電話と同じ運命をたどるだろう。オレの目的は犯人逮捕じゃない。勇敢な戦友は祖国のために死ぬが、オレは正義のために死ぬ必要は無い。そもそも、この男を警察に引き渡すのが正義かという点と怪しい。たとえ、名誉勲章をもらえても、別に正義だとは感じない。オレはこの男の罪を知らない。今のところオレが知っているこいつの罪といえば、オレの楽しみにしていた貴重な温泉での時間を潰したぐらいだ。大学の馬鹿どもも時々オレの平和な日常を不快にしていることを考えると、警察に突き出すほどのことじゃない。

錆びた足元に気を付けながら階段を登っていった。二階より上はきちんと階段がある。二階、三階にはいくつか部屋があったのに対し、四階は背が高く、がらんと何の仕切りもなかった。倉庫として使われていたのだろう。二階が事務所で、三階が作業室で、四階が倉庫。出荷するものは一階に下ろす。こんなところだったのだろう。

四階から外に出る扉があった。外は屋上になっていて、小さい小屋がある。木製らしく錆びてはいない。少し赤みがかっているのは、周りの錆の色が移ったのだろう。どれも、普通の状況なら写真を撮ったりしながら浮かれる絵になる風景だ。残念ながら、今は普通

の状況とは言いがたい。

小屋の中には木製の古びた椅子が四脚とテーブル、それから男の荷物らしいものが隅に置いてあった。ボウガンも一つある。なるほど、銃と違ってすぐに手に入るし、それなりの殺傷力もあるに違いない。逃げようとしたら上から撃たれるんだろう。厄介な代物だ。その厄介なブツの隣にオレのリュックが置かれた。

「そっちの椅子に座ると良い。あの椅子は壊れているから止めたほうが良い」

言われたとおりにすると、男は革ジャンを返してくれた。中に入れていた万年筆と、メモ帳は抜かれている。

「さつきも聞いたが何が望みなんだ？」

「隠れるのを少し手伝ってもらうだけだ」

「できれば、法に触れることはしたくないんだが」

「大丈夫だ。たまにお前みたいにふらっとここに来るようなやつがいるんだ。それを上手く追い返してくれば良いだけだ」

「どうしてオレなんだ？ これまでもふらっと来るやつはいたんだろう。そいつらはどうしたんだ？」

男はタバコを吸った。甘いようなにおいがこっちにきた。オレのハイライトじゃないらしい。

「二階に登ってくるようなやつはお前が初めてだったんだよ。だから、お前になった。これまでなのやつには何もしていない。ちょうどお前と同じように一階をぐるりと見て、写真を撮ったりして帰っていった。残念なことにお前は登って来た。そういう事だ」

男はオレの目を見ながら話し終わると、タバコに気付いたらしく、押収したハイライトをこっちに投げてくれ、火を差し出してくれた。悪人には見えない。右手のナイフ以外は、「オレが抵抗したり、逃げ出そうとしたらどうするつもりだったんだ？」

「やってみるかい？」

右手のナイフを示しながら、ふざけたように言う。オレは首を振るしかない。

「実を言えば助かっているんだ。できれば、私も血を見るようなことはしたくないんだ。分かるだろう。何か武道でもやっていたら、こんなナイフなんか頼らないで、相手を傷つけないように何とかできるのかもしれないがね。なにせよ君は頭は悪くなさそうで助かった」

なるほど、乱暴な男ではないらしい。オレが妙な気を起こしたり、警察にこの工場が包

囲されたりしない限りは当面の安全は図れるようだ。

「具体的にはどうすればいい？」

「なに、簡単さ。基本は見張りさ。だれか来ないか見張る。意外と変なやつが来るんだ。暇そうな兄ちゃんたちとか、君みたいなちよつと変わったようなやつとかさ。そんな大きなリュックサックを持ったやつは君が初めてだがね。ここはちよつと有名な廃墟らしい。そいつらが二階に上がって来たら、適当に相手の話に合わせて置けば良い。そして、上手く相手を帰らせればいい。とにかく、この小屋に入れないようにすれば良いんだ。難しくはないだろう」

「失敗したら？」

「最初に君が残念なことになるだろうね」

「上手くやるよ。要はあんたがここにしているとバレなきゃ良いんだろう」

「そういうことだ。それが君の生存条件だ。あとは、逃げ出さないぐらいか。逆を言えば、それさえしてくれるんなら後は何も言わない」

タバコを机の真ん中にある、瓶の中に入れる。四分の三くらいまで吸殻はたまっている。「ずっとここにいるわけだろう？ 食事とかはどうするんだ？」

「そっちは私が上手くやるさ」

「いつまでだい？」

「いつまでだろうね」

それ以上に聞くことは無かった。オレの安全さえ確保できれば、今、この男に変に突っかかる理由も無い。最後に一つ聞くことがあった。

「音楽や本なんかは聴いたり読んだりしても良いのか」

「さつきも言っただろう。生存条件さえ満たせるなら、後は何も言わない」

分かりやすく簡潔な答えだった。

八、

昼からは、三階の事務室の一角から外を見張った。廃墟になる前に使われていたであろう椅子に腰掛ける。木製なので錆びてはいないが、少し動くとギイと音を立てた。後ろに

は男がいる。別の同じような椅子に座り、相変わらずベルトには例のいかつい刃物があった。男の言ったとおり、オレは自分の生存条件さえ満たしていれば何の不足も無く好きにさせてもらえた。つまり、本を読んでも、ウォークマンで音楽を聴いても男は何も言わなかった。ただし、スピーカーはダメだった。それは、『男がここにいると外部にバレないようにする』という条約に反していたらしい。昼飯も少ないながらもパンをきちんと与えられた。アンパンを二つ。オレはあんこは好きじゃないから、アンパンなんて長いこと食ってなかったが、久し振りに食うと意外と美味しいものだった。

無口な男で、オレの読書ははかどった。

男が監視している窓の外を見ると、道の上を軽トラや、軽自動車が時々通っていった。歩いて近づいてくる人間は見えない。トラックや、普通車は滅多に通らなかった。こういう田舎では車が本当に人間の足になっているので、燃費の良い車こそが本当に良い車なんだろう。オレの親父は日本人らしく、「いつかはクラウン」と言っていたが、それは親父にとつて車が足というよりは、むしろ単に好きなものだったからなのだろう。百円ライターじゃなく、わざわざ五千円もするライターを使っているオレと同じような考えだと思う。母親にしかられなかったら、親父はクラウンを買うのだろうか。ちよつと分からない。

オレはカセットコンロでコーヒーを沸かすことにした。

「あんたもいるかい？」

「もらおうか。しかし、嫌に親切だな。監禁されているというのにわざわざ犯人にコーヒーをくれるなんて」

「どうせ、あんたに捕まらなくてもオレは今頃どこか知らない土地で本を読みながらぶらぶら外の景色でも見ているだけだ。今と大差ない。この場所は十分にオレの知らない土地だし、あんたはオレに読書を許可してくれた。そして、湯をわかすなら一杯も二杯も変わらない。これ以上に何か理由があるかい」

「なるほど」

「あんたのカップは自分で用意してくれ。男同士、それも逃亡中の犯罪者と間接キスをするのは嫌なんだな。あと、できればヤカンか何かがあると便利だな」

男はオレの足を椅子の脚と結び、上に上がって行った。深い緑色のマグカップと、ヤカンの代わりに鍋、それからボウガンを持ってきた。

「コーヒーを飲むのにボウガンは使わない」

「そうだな。だが、逃げたウサギの足を射抜くにはボウガンは便利だ」

オレの親切を逃げ出すための策略だという可能性を考えての装備らしい。

男の考えは当たらずとも遠からずと言ったところだった。オレはコーヒーぐらいは親切のうちには入らないと考えていた。一方、男との会話を増やしていくことで、男がだんだんオレに何かしら好感を抱いてくれ、すぐとは言わずとも逃がしてくれる可能性は考えていた。幸運にもウイスキーもあるし、うまく行けば三日ぐらいで帰れるかもしれない。しかし、残念ながら男の警戒心の強さはボウガンが示してくれ、ウイスキーが男の喉を通ることはしばらく無さそうである。

何にせよ、ふらっと地方を散歩するだけという旅行の計画は、どうも長くなりそうである。

コーヒーを飲みながら、内田百の随筆をだらだら読んでいるうちに夕方が来た。オレが確認した中では、朝のもんぺあさんが土手の上をスーパ一の袋を押し車に入れて歩いてきた以外、歩行者はいなかった。ほとんど本を読んでいたのも、実際はもう少し歩いてきたのかもしれないが、男が何も言わなかったところを見ると、おそらく通ったとしてももんぺ族ぐらいだったようだ。

コルトレーンのマイ・フェイバリット・シングスがイヤホンから流れると、男は立ち上がり上の小屋に登るよう言ってきた。

九、

しばらくはそういう日々が続いた。いまさら早く帰りたいなどとわめいても帰れないぐらい、小学生が考えても分かる。時々、家に残してきた様々な用事をぐるりと考えてみたが、案の定、用事といえるほどの用事は無かった。部活の合宿なり、バイトなり。用事といえは用事と言えるが、別にオレがいなくても何とか回っていく。それにわけを話せば後から何とかなる。用事というにはどうも役不足なものばかりだった。普通の大学生は大抵そういうものである。向こうの方では、今頃、そんな用事とは特に関係も無く、捜索願いなんかが出てのかもしれない。警察が来たら、男は逆上して、オレを殺すかもしれない。今は、冷静にここから無事に逃げることを考えなくてはいけない。あせらなくてもいい。逃げるのを、あせりなくなる理由といえは夜だった。男は自分が眠っている間に、オレ

が逃げないようにと、昼とは違い手足をきつめに縛った。廃墟で過ごす夜は気味が悪かった。

「お前の荷物はお前が好きに使えば良い」

男はそう言い、オレが寝袋を使うのを許可した。ただし、テントはダメだった。あと、懐中電灯もいけなかった。外に光がもれると、不自然だということだ。確かにそのとおりだった。日が落ちると、男は木造の小屋に上がり、そこから、監視を続けた。

三日に一回ほど十分暗くなると、眠るとき同様、オレを縛り、買出しに行った。

「もしも指名手配されていて、買出し中に顔がばれたりしたらどうするんだ？」

オレは聞いた。当然の質問である。そこで男が取り押さえられず、逃げてここに帰ってきたら、運が悪ければ、オレはやはり殺されるのだ。もし、取り押さえられたら？ 男がオレの居場所を素直にすぐ白状すれば良い。ただ、この場所のことを言わなかったら、オレも罠のお仲間になるより他ない。

「それは極めて可能性の低いことだ。もし、買出しに行かなかったら、かなり高い確率で二週間程度で死ぬ。死ななくても、ものを食わなければ、衰弱していく。だから、買出しは仕方が無い。仮に指名手配されていない普通の人間でも、外を歩けば交通事故に遭う可能性はある。買って来た食品の中に何か悪い環境ホルモンが入っているかもしれない。じゃあ、誰も外に出歩かないか、何も食べないでいるか、答えはノー。外も出歩かし、コンビニのおにぎりも食う。ただ、交通ルールを守るとか、明らかに体に悪そうなものは避ける。そうやって、パーセントを低めるだけさ。今の場合なら、オレはバイクで遠くの町に買出しに行く。遠くの町でなら見つかったとしても隠れ家を移せば何とかなる」

バイクをどこかに隠しているらしかった。バレないのであれば、買出しに行くこと自体は俺にとってもありがたいことだった。ちょうど、今吸ってる一箱でタバコも切れる。

「お前のガスコンロを使っても良いか？」

「普通、監禁している男はそういうことは聞かない」

「それもそうだが、一応お前のものだ。オレは法律は破ったかもしれないが、自分の中のルールくらいは守る」

「法律を守るといふのは、あんたの中ではルールにはならなかったのか？」

「お前はどうかんだ？」

「原則としてはなるだろうな」

「例外は？」

「そりや少しはある。未成年の喫煙は違法だが、オレは昔から吸っている。赤信号も急いでいけば無視する。あとは、立小便とか、何にせよ、小さなことぐらいだ。自分の生活が法の裁きで脅かされるほどのことはしない。買い物ひとつに寒いなか一時間近くバイクを走らせるようなね」

「もし、それが自分のルールとは違っても、法による罪が大きなものなら絶対に犯さないのか？」

灰が崩れてジーンズに落ちた。

「あいにくとそういう経験はまだ無い。若いんだ」

男は、特に何も言い返して来なかった。

オレがタバコを吸い終わると、例のごとくロープの出番だった。きつめに手足を結ばれる。小さい明かりを部屋の隅、絶対に外にはもれないところに置き、彼は出て行こうとする。

「ハイライトを一カートン。あと、インスタントじゃないコーヒーとドリッパーとフィルターを買ってきてくれないか。まだしばらくはここにいなくちゃならないんだろう」

男はこちらを振り向かない。ドアに手をかける。ダメ元で言っただけだ。ダメなら仕方が無い。

「カセットコンロの使用料と言ったところか」

一言残して、建付けの悪い扉がボタンと閉められた。

十、

「ねえねえ、こつち来てみね」

「すげー！ こんなところに草が生えとる！ 映画みたいじゃな」

日付感覚はきちんと覚えていない。朝起きて、本を読み、タバコを吸い、コーヒーを飲み、夜が来たら眠る。毎日、天気も変わらない。晴れてるようで、なんだかぼんやりしたような灰色の空。太陽も低く、ここら一帯がこの廃墟の錆に侵されてしまっているようだ。そんなルーティンワークの中で、カレンダーも時計も無いのだ。何日が過ぎたのかは分からない。無人島に漂流したカップルみたいに日数を何かに刻むなんてしない。別に急いじやいないんだ。

オレの初仕事がやってきた。

『私は上の小屋にいる。しくじるなよ。変な気も起こすなよ。』

声を立てずに男は筆談でオレに注意する。オレの万年筆とメモ帳はまさかのところで男の役に立ったようだ。毎日一回は、だれか来た時のあしらい方を男にくどくどと話されていた。同時に、オレがもしもその通りに動かなかったときの事もだ。短い筆談だけでオレは十分に理解できた。

『良いか。三人がかりで、オレに襲い掛ければ、確かに私は警察行きだろう。間違いない。私は武術の心得も無い。特に腕っ節が強いわけでもないからな。ただし、三人のうちの一人ぐらいならこのナイフで何とかできるんだ。分かるな。三人のうちの一人だ。それだけ覚えておいたら良い』

オレが読み終わるのを男は目で確認すると紙片を丸めてポケットに入れた。

「はしごがあるぞ。オレ登ってくるけん、下から写真撮ってや」

金髪の男はブーツの女に言う。岡山弁らしい。くだらん事を頼む男と、それを引き受ける女だ。

ブーツは外に出る。フードにファアのついた白いコートを着ている。赤いデジカメを構え、建物全体の写真を撮っている。構図をとっているらしい。

金髪がはしごを上ってきた。カンカン……。 「気を付けてねー」手を振ってこたえる。呑気なものだ。

オレはいつもと変わらないような格好で待った。二階に入ってすぐの事務所の例のボロい椅子にすわり、本を広げる。いつものコーヒーの代わりに用意していた缶コーヒーを横に置く。タバコは吸わない。

「おうっ」

金髪が声にならないような、驚きをあげた。

「あ、ああ、こんにちは」

オレも多少驚いたような感じを出す。

「おめえ、こんなところで何やっとなな？」

「読書です。家が近所なので。ここは静かだし、独特の雰囲気を持っているから気に入ってるんです」

変な人には変わりないが、不自然なことは無い。そもそも、こんなところに普通の人が

いて、普通の回答をする。それ自体がおかしなことなのだ。

「はあ、なるほどね……」

金髪は残念そうに、納得した。どうせ、彼女とここでいかがわしい行為でもする予定だったのだろう。確かにオレも彼女と来たら、十中八九キスぐらいはするに違いない。錆びてない安全な場所さえあれば、それ以上もありうる。若い男の正常な思考だ。この金髪は普通の人間らしい。全く、不自然な男である。

「じゃあ、オレは上に行くけんの」

「上は危ないですよ。階段が崩れそうなんです」

「よじ登ればいいが」

「失敗したら破傷風にかかりますよ？」

「ハシヨウフ？」

頭が悪いらしい。見た目で人を判断してはいけないが、会話の中で判断するのは問題ないだろう。何にせよ助かった。口で丸め込めれる。

「はい。この廃墟って、赤いでしょう。錆なんです。錆で傷を負ったら破傷風になる可能性があるんです」

「ふーん。怪我したら危ねえってことか。で、なんじゃ、その破傷風ってのは？」

「病気の名前ですよ。かかったら、死ぬ可能性も高いです。特にね、その症状が怖いんですよ。熱が出て、最後は体を逆海老のように反らせて、強直性痙攣っていうらしいんですけどね、とにかく苦しみながら死ぬんです」

苦しみながら体を反らせるジュエスチャーを添えて、金髪に説明してやる。

「怖えなあ。ありがと。上にはのぼらんようにするわ」

金髪はマルボロをくわえて、行こうとした。

「あ、待った。床がもろいところもあってそこは危ないんですよ。一階から屋根の破れたところなんかが見えたでしょう。二階を見て回るんなら、案内しますよ」

「お、助かるわー」

助かったのはこっちである。

「おーい。なんか変な親切な頭良さそうなやつがおつてな。上にのぼるのは危ないらしいけん、二階見てまわってから降りるわー。なんか、ここで怪我したらハンソンプウとかいう病気になって、何とか痙攣ってやつ起こすらしいんよ。ちよつと待って」

金髪は窓から叫び、女は、分かったとか言いながら、その光景を写真で撮っていた。そ

れなりにかわいい方で、ちょっと腹が立った。とりあえず、読書好きの、根暗、変人作戦は上手く行ったようである。

「彼女さんですか？」

「おう。かわいいじゃろ」

「きれいな人ですね」

「おめえ、彼女おるん？」

「一応いますよ。別に美人って事は無いけど良い子です」

実際は、金髪の彼女よりも間違いない美人だ。別に、オレは、モテるわけじゃないが、狙った子に関してはきちんに行くのだ。ただ、今はオレの彼女の話じゃない。工場廃墟で読書をたしなむ謎の男の話だ。

「ふーん。でも、おめえ、自分の彼女を美人じゃねえとか言っちゃおえんじゃろ」

「え？」

「自分の彼女のことを悪く言っちゃいけないじゃろってこと。好きなんじゃろ？」

「はい、好きだから付き合ってるわけです」

「なら、悪く言っちゃいけないじゃろ」

「でも、はたから見てて美人では無いですよ」

「おめえはその子の顔が嫌いなんか？」

「いや、好きです」

「なら、周りには関係ないじゃろう。好きな女はもちろん愛さなくちゃいけないし、その上で、その子の悪口なんか言っちゃいけない。たとえ、本当はブスでもじゃ。そうせんと、好きな人にまでそんな言われてたらかわいそうじゃろ。好きな女をかわいそうにしても良いんか？ 嫌じゃろ。じゃけん、彼女のことを美人じゃないとか言ったらおえんわ」

頭は悪いが、物事の分かった男である。なるほど、それなりにかわいい彼女を連れていけるのも納得できた。

途中、そこが危ないだの何だの言いながら周る。だから話をしながら。

金髪は、去年高校を出て、就職したらしい。だが、三交代の勤務は辛く、上司との揉め事もあって、今はフリーターらしい。

「ここは、かっこええな」

「ですね」

「なんか、こう、よく分からんけど、チンコがキュッてなる感じがする」

よく分からない。チンコがキュツ。どういう感覚なんだろう。でも、なんとなく、金髪がここに特別な何かを感じているということとはよく分かった。キュツ。

「上も見てみてえな」

「きつと上もこのこと同じですよ。赤くて、変な部品が転がってるだけ。もしも、この建物が百階あつても、ずっと同じですよ。百階までずっと同じだとしても全部見ます？」

「多分、五階ぐらいでやめるな」

「でしょう。全部は見なくてもいいんですよ。残しとく方が、もしかすると何かあるかもと思えるじゃないですか」

「おめえ、頭ええな」

実際、何かあるのだ。上がられては困る。だが、もしも、百階まで全部同じだとしても、オレはやっぱり全部見てみたくなる気がした。あんまり、頭が良いとは言えないのかもしれない。

「また、暇だったら来るわ」

「いや、僕はここに住んでるわけじゃないんで」

「でも、似合つとるが」

よく分からないことを言い残して、工場から出て行き、彼女と楽しそうに話しながら、車に向かつていった。また、来られると困る。第一にフリーターなんだからいつでも暇なわけだからより困る。だが、ここはそんなにしょっちゅう来るべき場所じゃない。金髪はなんとなくそういうことが分かる人間だとオレは思った。

——キュツ。

十一、

「サンキュ。上手いことやってくれたな」

男は、コーヒーを沸かしながらオレに言った。そして、例のごとく、ロープを走れない程度に結ぶ。さすがに、人をあしらうときに、こんなロープを付けているわけには行かない。心なしか、いつもより緩く結んでくれているようだ。

その日も、あとはいつも通りだった。コーヒーを飲みながら、オレは本を読む。オレは読書は好きなのだが、文字を読むのは苦手な遅い。それで、まだ、読んでない小説はあと一冊残っている。とは言えど、あと、三日ほどで、その残りの一冊もさすがに読み終わるだろう。そしたら、もう一度、前読んでいたやつを読み直せば良い。読むのは苦手だが、読書は好きなのだ。

男は、本を読んでいるオレの代わりにだいたい自分で見張りを続けていた。一日に一回ほど、オレに見張りを頼み、四階の倉庫に行き、ボウガンの練習をしていた。

どこで拾ってきたのか、木の板に的を書き、狙いを定めて撃っている。オレが逃げ出したら撃つというだけあって、それなりに上手い。それなりの距離の的に六割くらいの確率で当てている。

そのボウガンの練習は、オレへの脅しなのだろうか。それとも、単に暇つぶしでやっているだけののだろうか。最初は脅しに違いないと思った。だが、それにしても彼は妙に上手かった。どうやら、オレが来るまでもボウガンの練習をしていたようだ。それは、今のような状況になることを男が先読みしていたからなのか、もしくは単に元々ボウガンを使うサバイバルゲームか何かをしていたのか。むしろ、オレからは、単に遊び、つまりは暇つぶしとして、一応持ってきたボウガンで遊んでるように思えた。実際、見ていておもしろそうだった。

男の代わりに監視している間は本を閉じ、タバコに火を点け、外からこつちが見えないように注意しながら見張る。二月も終わりに近づいた空は相変わらず灰色で、ぱっとしない。これまで、この季節の空がぱっとしないなんて気付かなかった。一人の時、オレはよくぼんやり景色を眺めるなんてしていたが、なぜか気付かなかった。黄砂というやつの影響なんだろうか。昔、読んだ漫画で、春前後くらいに、中国の方の砂漠だかの砂が大気に巻き上がり、それで空がぼんやりするとかいう話を読んだのを思い出した。たしか、その漫画では主人公が、その空を見て、ノストラダムスの大予言で世界が減ぶんだとかわめきたてていた。ちょうど、世紀末ってやつだった。現実では、世界は減ばなかったし、二千年問題とかも起きなかった。まさに、杞憂というやつだった。

——バシイ。

ボウガンのささる音は結構響いた。この男の普段の慎重さを考えると、この訓練は奇妙な行動だった。もし、仮にオレの推測どおり、ただの暇つぶしだとしたら、さらに奇妙だった。

この廃墟が百階まであったら、多分この男も一番上まで上るタイプなのかもしれない。

夜が来る。今日は買出しは無いようだ。二人でカップ麺をすする。

「おっさん、ウイスキー飲んでも良いかな？」

「酔わない程度ならな。あと、オレはおっさんじゃない」

「いつまでも、あんた、お前、君じゃ味気無いじゃないか」

「私の名前を知りたいのか？」

「そうだな、名前が分かっているほうがありがたいな」

「ニュースの事件で私の名前は出ていたかもしれないぞ。もし、小僧がそれを知っていたら、怖くなって明日から使い物にならなくなるかもしれない」

「オレはニュースは見ないから分からない。というかテレビ自体見ないんだ。そして、小僧じゃなくて、オレの名前は福田だ。あんたと違って、別に隠さなくても良いちゃんとした名前がある」

「そうか。福田か。まあ、名前の話は良いじゃないか。お前とか、あんたでいいじゃないか。ウイスキーを飲む上で名前は必要ないだろ？」

「おっさんと呼んでも良いんだな？」

「ふん、好きにしたら良いさ。最初に言ったお前の生存条件に反しちゃいないさ」

オレはジャック・ダニエルをストレートでコップに少しついで、飲む。久々のウイスキーは喉に熱く、美味い。タバコに火を点け、ちびちび飲んでいった。

確かに、このおっさんとオレの距離は近づいている。逃げられるのももう少しかもしれない。

「細田だ」

「ん？」

「私の名前は細田だと言ったんだ。おっさんとは呼ぶな。そんな歳でもない」

「じゃあ、細田さんか、細田さんウイスキーいるかい？」

「いや、私はいらないよ、福田さん」

男は普通に言っただけが、突然さん付けで呼ばれるのは何とも気持ち悪かった。

「やっぱり、お前あんたが良いな」

「だから、言っただろう」

「そうだな、いや、ストックホルムシンドロームっていうのを狙ってみたんだよ」

「何だそりゃ？」

ジャックをまた一口飲みながら答える。

「犯人にネタをバラすのも嫌だけだな。まあ、良いよ、教えるよ。オレが教えなくたって有名な心理現象だから、あんたも名前を知らないだけで内容は知っているかもしれないしな。昔、ストックホルムで、人質を取った事件があったんだ。今みたいに一人だけの人質じゃなくて、もっと大掛かりな犯罪だ。これが持久戦になったんだ。そしたら、最後にどうなったと思う。人質が犯人をかばったり、犯人も人質を大切にしようになったのさ。中には恋愛感情を抱く者さえいたんだとき。それで、上手くオレも犯人に大事にされて自由の身になれないかなと思っただけさ」

「いや、オレはお前に恋愛感情は抱かないぞ」

「ははは、そりゃこつちもゴメンだよ。でも、まあ今の場合、別にオレも特別に不便なこととさせられてないし、構わないんだけどさ。こういうのはこういので面白いし。ボーガンやナイフは別としてね」

「そうだな、ボーガンやナイフはできればこちらとしても使わせてもらいたくないな。しかし、こういうのも面白いってか、元気なガキだな」

「いや、別に元気なわけじゃない。単に家にいても暇なだけだよ。学生なんて毎日同じようなことが続くばかりだしさ。妙なことさえしなけりゃ、あんたはオレに危害も加えないようだし、まあ悪く無いよ。温泉に行けなかったのが残念なぐらいさ」

「そういうやつもいるんだな。でも、そういう同じような毎日こそ良いものなんだぞ。まあ、まだ分からないか、何せ若いしな。さて、そろそろ寝るぞ」

そう言って、オレの手足に縛られたロープは、いつもより少し緩かった。気のせいじゃない。

この調子で行ったら、オレは案外早く逃げられるかもしれない。

十二、

ぎらりぎらり

黒い鉄に、まんまるレンズ

くるくる回した、オレに向く

そして、ぎらりぎらり

ぎらり、と言ってもナイフじゃない。カメラの話だ。

またしばらくすると人が来た。日数はやはり数えていなかったが、ちよくちよくここには人が来るらしい。写真小僧だと自己紹介して、一眼レフを嬉しそうに示し、フォーカスをくるくるあわせて、レンズの中でオレは、赤茶けたブックカバーの文庫本をかざして、読書家だとの挨拶。

挨拶が終わると、写真小僧（小僧とは言い難い年齢のようにオレには見えるのだが）は、赤い建物のいたるところにレンズを向けてカシャカシャ忙しくシャッターを切っていた。オレはそれについて、歩いてみた。

「こうだよね、こう」

「人間の作ったものが良いよね」

「ユカさんが座つてるとより良いな」

「やっぱり自然にしか作れないものだなあ」

「時間はやっぱり連続しているものかしら」

だらしない格好で、ジーンズの裾が床に当たって赤くなっている。それをオレが注意してやっても聞こえていないらしく、延々とブツブツ何か言っている。聞こえていないと分かると、オレも特に何かをしやべる必要も無い。ただ、ついて行くのみだ。シャッターの音と、彼のよくわけのわからない、おそらく写真についての独り言が、壁に跳ね返って聞こえるだけで実に気持ち悪い。また、その独り言が何の抑揚も無く、単なる音のようで気持ち悪いのだ。しかし、何だか妙に居心地の良さも感じる。エリック・ドルフィーのフリージャズに近いものかもしれない。一見、単なる気分の悪い不協和音のように聞こえるが、きちんと何かしら上手く組み合わさっているからこそ、あれは心地よい。錆と写真小僧。

「ああ、終わってしまった」

声に抑揚が付き、シャッター音が途絶える。フィルムが切れたらしい。

「ああ、どうも。これ見る？」

くると、こちらを向き、正に適当にぶら下げたといった感じのベージュのシヨルダーバッグをガサゴソと探り出し、オレに分厚い綺麗なアルバムを渡してきた。写真に関するものだけはきちんとしているようだ。なるほど、写真小僧。

いろんな写真がある。森や山、海みたいな自然の風景。弁当を食ったり、キャッチボールをしたり、勉強、仕事、楽器を吹く、つまりは様々な人間に、『ユカさん』らしき女性に、小便をする犬、ア리가群がっているカブトムシの死骸に、彫刻、工場、コップの裏側、眼球、合わせ鏡。とにかく、普通なものから、変なものまでぎっしりとあり、おそらくその写真を何とかつなぎ合わせると、一つ小さな地球ができてしまいそうさ。

カシヤツ。

「さて、上にも行ってみようかな」

オレが写真に感心している内に、写真小僧はフィルムを入れ替えてしまい、アルバムを眺めているオレを撮ったようだ。オレは慌てた。上に行かれるのはまずいのだ。

それで、口をついたのが、さっきの、ざらりざらりという詩だった。彼はよく分からないような顔をしている。

「僕は読書家だからね。写真を見せてもらった礼に一つ作ってみたんだ。どうだろう」
少し戸惑っていた。

「僕は、君の写真は良いなと思ったよ。そして、それを詩として読んだ。それに何の批評も加えないのは、君、失礼というものだよ」

困った顔をしている。このまま上手くこっちの話に乗ってくれたら何とかかなりそうさ。

「失礼といえば、勝手に人を写真に撮るのは失礼だよ」

「君も勝手に僕の写真を詩にしたじゃないか」
早い反応だった。

「うん。読んだ。僕は失礼な人だからね。何も問題ない」

「そうか、君は失礼な人だったのか。それじゃ、失礼な人の顔をもう一枚撮らせてもらおうか」

レンズを覗き込み、シャッターが鳴る。

「これが、僕から君の詩に対する評価だね。これで、僕は失礼な人じゃないね」

「ありがとう。ところで、失礼じゃない人なら、上の階には行かないで欲しいんだ」

「なぜ？ ここは君の家じゃないよね？」

「僕の家じゃない。でも、上には大切なものがあるんだ。だから、行かないで欲しいし、写真にも撮らないで欲しいんだ」

「そう言われると撮りたくなるけど、一体何なんだい？」

「僕は、読書家と言ったよね。上には書きかけの原稿があるんだ。そこにはだれも入って

欲しくないんだ。写真だったら、自分の撮りたい絵の中に邪魔者が入るみたいなものなんだ。分かってくれるね？」

写真小僧は、悩んだ。結構、長い時間のように感じた。

「分かった。代わりに、それを書き終えたら、そこを撮りたいんだ。完成した君の原稿のあるそこをね。それで、良いだろ？」

どうやら、オレには詐欺師の才能があるのかもしれない。

写真小僧は、また来月くらいに来ると言って、よたよたと土手の夕陽の影を歩いて帰っていった。

芸術家は傲慢じゃなくちゃいけないけど、礼儀を知らねばならないのかもしれない。全く新しい発見だった。

十三、

風呂に入りたい。そうなのだ。風呂に入るといのは人間の自然な欲求で、かつ、赤い錆に囲まれているはなおさらなのだ。第一に、オレは日本人なのだ。温泉がベストだが、この際、贅沢は言えず、コインシャワーでも良い。

「お前も大した変人だな」

新品のフライパンに、もやしと卵が踊っている。買出しの次の日は良いものが食えて実に幸せだ。日本人の風呂の欲求にならぶ、人間の食への欲求というやつなんだろう。

「あのカメラ男、写真小僧だっけ、あいつが来たときは正直、私も、いよいよまずいなと思ったけど、よく追いつけてくれたよ。いや、大した変人だよ」

「変人か。まあ、確かにそうかもしれないが、むしろ、頭がキレると言って欲しいもんだな」

ロープは解かれた。買出しの時、縛られるのは仕方が無い。どんなに信頼していても、インコは鳥かごの中で買うべきだ。ただ、目に入るときだけでも、放し飼いにする。それだけで、十分に信頼を得ている。そう考えても問題は無いはずだ。

男は、変人なんて言う言葉を使ってオレを誉めたが、実際に感謝、いや、何て言うのだろうか。信頼も少し違う。何にせよ、オレのロープが解かれる方向に彼の心は動いたのだ。プラスの方向に違いない。

「ざらりざらりだろ。あの詩じゃあ、頭が切れるとは言わないだろう。変人だ」

もやし炒めを食う。誰が作っても同じような味がするようで、何か違うような味にも感じる。何にせよ、だいたいのもやし炒めは美味しい。犯罪者のもやし炒めも美味しい。

窓にはカーテン代わりに板が当ててある。オレは先日、男に蝋燭を買ってこさせた。人間は夜になったら眠る。夜はいつからだろう。光がなくなったら。電球が発明される前は夜は長かったのかもしれない。しかし、電球が発明される前も、人間はガス灯を使っていたし、その前も、きっと火ぐらい起こしていたに違いない。火を見つける前は。それは教科書では、人間とは呼ばない生き物の時代だと習った。しかし、夜はいつからかは教科書には書いていなかった。人間は夜になったら眠る。ただ、起きている間は何か灯りが無くちゃいけない。人間が灯りを消して、初めて夜が来るのだ。

だから、男に蝋燭を買って来させた。懐中電灯でも良かったが、上から吊り下げるのも大儀だったし、タバコに火を点けるのに、蝋燭の方が便利に思われた。男はオレの蝋燭の必要性の演説を聞くと、「確かにな」と呟き、買ってきてくれた。代わりに、カーテンの代わりを作らされた。その辺の平たい赤い部品や、裏の山から落ちてくる木の葉に、ポীগンの周りの周りに散らばっている木の板なんかをガムテープで適当にひつつけるだけで簡単にできた。そうして、蝋燭はやってきた。

「お前、好きな女の子とかいるのか？」

男は不意にそんな質問を投げってきた。起きている間は、人間には光が必要で、そうやってきちんと起きている間は、人間は何かしたくなる。

「いるよ。彼女がいる。あと、愛してはいないけど、好きだと思う人もいる」

京子さんのことだった。別に、そんなことをこの男、細田さんに言う必要も無かった。だけど、人間は起きているうちは何かをすべきだ。できるのなら、正直に。

「そうか」

「おっさんは？」

「いたよ」

犯罪者になってしまった今となってはいないのだろう。好きであっても、相手に受け入れられなかったら、それはいないのと同じことなのかもしれない。

細田さんはオレに蝋燭の光を消させて、外に出させた。外は満月だった。満月でも、工場廃墟は赤い。昼の色とは違って、やっぱり赤には違いない。日本語には、そういう二つの赤を言い表す単語はない。昼の赤と夜の赤。本当に同じ赤い色の建物なんだろうか。

いや、そんなことはどうでもいい。

細田さんは周りを見渡す。だれもない。昼でさえ滅多にだれもないのだ。当たり前だ。

「私には好きな人がいたよ」

だれもないことを確認すると細田さんはタバコに火を点けて話し始めた。ピースの甘い香りがする。

十四、

目が覚めた。カーテンのせいで暗くてよく分からない。細田さんは眠っているらしい。初めてだった。いつも、細田さんは朝早く、少なくともオレより早くに起きていた。

細田さんは熟睡していた。昨夜のせいかもしれない。

昨日、細田さんは自分のした犯罪について教えてくれた。長い時間をかけて、ゆっくり話してくれ、オレは真剣に聞いた。

縛られた手足で何とか壁にもたれながら立ち上がる。壁がきしみ、音がする。細田さんは起きない。オレは、灯りをつけるために、いつも使うカセットコンロを点けた。カチツという音がして、細田さんの顔が照らされ、ドキツとしたが、全く起きる様子は無い。

そのままカセットコンロの火で、手首のロープを焼き切った。少し火傷もしたが、縛り方が緩く、ゆとりがあつたおかげで、そんなに大したこともない。ロープはあつけなく切れた。その手で、足のロープを解く。これも簡単に外れた。グレゴリーのリュックを背負い、そっと、小屋から逃げ出す。

とても、あつけなかった。土手の上から、さっきまで逃亡不可能と思われていた、赤い廃墟を見下ろす。まだ、周りは暗いが、川の向こうの山の空が白んでいる。

走って、橋を渡り、町に着いた。丸いポストの前を通り、駅に入る。あの男は馬鹿ではない。いくら田舎といえど、駅まで来て、オレをさらうような危険を冒すことは考えにくい。男がわざわざオレを探すことは考えられなかった。そんなリスクを犯してまで、オレを捕まえるぐらいなら、また、別の隠れ家を探せば良い。細田さんにはバイクもある。

それでもオレは走った。心臓がバクバク鳴っている。放射冷却で冷え切った駅のホーム、

誰もいない中、一人で汗をダラダラかいて、息を切らす。自販機でポカリを買い、飲んでいると息も整いはじめ、タバコをくわえた。額に前髪が張り付くほどの汗が冷えてきてぐつと寒さを感じた。もしかすると、こんなに走らずとも、いや、くわえタバコでも逃げ出せたかもしれない。簡単すぎて拍子抜けした。早起きは三文の得とはよく言ったものだし、しかし、目覚ましも何も無い中で起きる時間をコントロールするのは不可能だった。単に運が良かったのだ。確かに、オレの策も効いたのかもしれない。男はオレに対して気を許したからこそ、彼は今日の朝、起きれなかったのかもしれない。だけど、やはり運だったのだ。人生では、大切な決定とかいうものこそ、案外、運任せなのかもしれない。

オレの監禁生活は、驚くほどあっけなく終わったのだ。

十五、

安心しきって少し眠ってしまったのだろうか。電車がホームに来た音と寒さで目が覚めた。駅の時計は九時過ぎだった。何本の電車がオレの前を素通りしたのだろう。細田さんは来なかったのだろうか。まあ、来るわけもない。そういう人だ。

駅員に、電車の時刻表をもらおう。寂しい時刻表だった。

すぐに電車に乗っても良かったが、やめて、うどん屋に寄ることにした。腹が減っていた。きちんとした汁物はしばらく食べれていなかった。それ以上に、こういう奇妙なことが起きた後は、何かしらリセットボタンを押したかった。もちろん、本当にリセットが押せるわけじゃない。過ぎた事は消えないし、昔には戻れない。ただ、それでも、オレは時々、リセットボタンを押さなくちゃいけない。押しても押しても言うことをきかないリセットボタンでも、押さねばならない。

町の中を歩いて、暇を潰す。町といっても、何もない。寂れた民家がパラパラとあるだけだ。写真小僧なら喜ぶかもしれない。しかし、町の外、つまりは橋を渡るなどできない。人のいないところで細田さんに会えば、オレは連れて行かれるだろう。

結局、大した時間つぶしはできなかった。一回読んだストーリーの分かっている小説で、うどん屋が開くまで時間を潰した。橋を渡る前と特に何も変わらず、かきあげの乗ったうどんを食った。変わったといえ、テレビがついていないで、ラジオがついていた。ニュースの流れる時間じゃない。

財布を開き、千円札を出そうとした時に異変に気付いた。そうだ、オレの財布があるということ自体がそもそも変なのだ。入っていても、金が入ってるなんて普通は有り得ないのだ。細田さんはオレの財布を取らなかったのか。千円札の間に白い紙切れが挟まっていた。

『最初の財布の中身 37,542円』

ハイライト 1カートン 2,900円

コーヒー豆 300g 476円

……』

長々と書いてある。オレが頼んだものだった。食費などは引かれていない。

「お前のものは、お前が使うべきだ」

細田さんの言葉を思い出した。彼は、きちんと自分のルールに従っていたのだ。

うどん屋のおっちゃんにごちそうさまを言つて出る。橋の向こうへ行こうと思った。橋を渡らなくても工場廃墟は川の反対側から見える。いや、橋を渡るにせよ、渡らないにせよ、そんな危険は本来冒すべきではない。映画では勇敢な兵士は死ぬのだ。

ただし、自分の中のルールを守らないやつは、現実ではきちんと生きていけない。

きちんとは生きられないのだ。

十六、

「それじゃ、あんたは別に犯罪は犯していないじゃないか。正当防衛って言えるだろう」

細田さんは黙って中から椅子を持ってきて腰かけた。

「そう。お前の言うとおり正当防衛だとも言えるかもしれない。取り押さえようとしたストーカーと取っ組み合いになり、不可抗力で相手の持っていた包丁が刺さつたのだと」

細田さんには好きな女がいた。そして、その女がストーカー被害にあっていて、細田さんは待ち伏せしてそいつを捕まえようとした。相手は包丁を持っていて、それが首に刺さつたらしい。細田さんがわざと刺したわけじゃない。取っ組み合いの中で刺さってしまったのだ。

オレは、隠れる必要なんて無いじゃないかと思った。だが、もちろんそれだけのことじゃないのだ。細田さんは馬鹿じゃない。オレもタバコに火を点け細田さんの言葉が継がれ

るのを待った。

「女は私を見て言ったんだよ。人殺しだと。それで、私は走った。考えたんだ。私は本当に、あのストーカーを殺すつもりは無かったのかと。あつたのかもしれない。愛する女性に嫌がらせをするやつ。男は小学校の物心ついたガキから、勃起もしなくなったじいさんまで、好きな女に嫌な思いをさせるものが許せない。そうだろう」

「確かにそうだ。でも、だからといって、それが正当防衛じゃないということにはならないじゃないか」

「その通りかもしれない。だけど、それは法律上の問題だ。私のルールとは関係ない。君には本当に殺したいやつがいるかい？」

オレは考えた。腹の立つやつやつの顔を順番に頭の中でめくっていく。何枚もめくっていくうちにだんだんそいつらの顔の輪郭はぼやけ始め、名前だけしか思い出せないようなやつにまでいたる。しばらく悩んでから答えた。

「別にいないな。オレは人を殺したいなんて思わないんだ。人を殴りたいとも思わない。そういうのは嫌いなんだ」

「道徳的なんだな」

「ちよつと違うね。そういうことは単にオレの心をにごらせるからしたくないだけなんだよ。道徳とはまた少し違う」

「じゃあ、良いやつなんだろう。なんとなく分かる。それじゃあ、自分が殺したいんじゃないって、死ねば良いのと思うやつは？」

京子さんの顔が浮かんだ。なぜかは分からない。少し考えてから答える。

「……いない」

「そうか。本当かどうかは気にしないで。でも、人間が生きていけば、そいつが嫌いだろうがなんだろうが、何かしら、死ねば良いのと思うようなやつがいるのは、自然なことなんだ。なんとなく分かるだろ。」

もしもだ、そういうやつが、自分の手以外でも死んだとき、お前には全く罪悪感はないか」

オレは沈黙した。あるに違いない。その人が、京子さんが、勝手に自殺したとして、自分に全く原因が無くても。

『死ぬということは罪なのだ。どんなに迷惑をかけないように死んだとしても、やっぱり、あるべきものが無くなる。水面に波紋ができる。水面に浮かぶ葉が揺れる。それは罪なの

だよ。

『ああ、君にはまだ分からないかもしれないね』

昔、どこかで読んだ話、漫画だったのか、小説なのか、映画だったかもしれない。主人公が飼っていた蛙が死んだ時に、老人が主人公に向かって言った言葉だった。当時のオレには全く分からなかったが、今ふとその言葉が浮かんできて、何となく分かった気がした。沈黙を破ったのは細田さんだった。

「お前は愛にはセックスは必要だと思うか」

突然の話題の変更でオレは驚いたが、ひるまず即答した。

「オレは必要だと思う。愛し合う男女にはセックスが必要だ」

「じゃあ、セックスには愛は？」

オレは少し悩んで答えた。「ある方が良いが、必要無い場合もあると思う。だけど、そういう事ばかりしていると、世界は戦争だらけになると思う」

「愛の無いセックスは戦争を起こすか」

細田さんは笑った。オレはもう一本ハイライトを点けて深く煙を吐き出しながら考えた。「片方しか愛が無いセックスは戦争を起こすだろうか」細田さんは続けて問いかけてきた。

「分からない。難しい問題だと思う。だから正しいことは分からないし、上手くまとまらないけど、オレの考えを言ってみる。オレは愛の無いセックスも時々する。多いときは愛のあるセックスよりもたくさんする。それは違う相手とだよ。

それは、お互いに愛の無いセックスだ。でも、それは戦争を起こさないようにオレは思う。なぜかは分からない。もしかすると、そこには愛の代わりになるものがあるのかもしれないし、単にオレが気付いてないだけで、戦争は起きているのかもしれない。でも、やっぱり、オレの目には戦争は起きていないように見えるし、愛も無いと思うんだ」

「それは本当に愛が無いのか」

「分からないけど、オレは無いと思うよ」

「そうか」

もしかすると、愛があるのかもしれない。だけど、おそらくない。そういうものは愛とは呼ばないと思う。本当に戦争は起きていないのか。夜の境目と同じで、戦争と平和の境目なんてあいまいなのかもしれない。

セックスに確かに存在するのは快楽だ。敏感な部分の肉と肉が、すえた香りと、潤滑液

に囲まれ、擦れていく。そして、お互いに更なる摩擦を求める。そこには快樂がある。間違いないと思う。しかし、セックスが生み出すものは、あまりにあいまいすぎる。愛や戦争も含めて。

「私は、彼女とはセックスをしていた。付き合っただけではなかったが、互いに愛があると信じていたし、第一に間違いなく私は愛していた。そして、彼女は私に、人殺しだと言った」

細田さんが言った。

オレの頭の中にはさつきから京子さんとのセックスが映っていた。もちろん、細田さんの話は聞いている。それを考えるのに、オレの頭は京子さんとのセックスの映像を選んだのだ。豊満な京子さんの乳房を噛む自分の姿と、それに反応し、身をよじらせる京子さん。愛する自分の彼女の顔は全く出てこなかった。

「相手には愛が無かったと？」オレは聞いた。

「セックスをすれば愛があるとは限らない。そんなことは、私もお前も分かっている。ただ、自分の愛する人には、人間は『人殺し』などとは言わない。愛して無い人に向かって言う言葉だ。そうだろう」

「そうだと思う。愛していなくても有意義を求めることはありえるが、愛する人にはそういう言葉や感情は向けない」

京子さんは、オレのモノを啞え込んでいる。京子さんの喉の奥に向かって、オレのモノは小刻みに何度も脈打つ。

「だけど、そういうのは違うと思う。きっと、セックスとあなたの彼女、そしてその発した言葉に、死んでしまったストーカーに細田さん。とても、親密に接点があるし、深い関係を持っている。そこには愛があったかもしれないし、無かったかもしれない。それはオレには分からない。オレは、自分とセックスをする女性を愛しているかさえ分からない。でも、そういうものだと思うんだ。そういうのが悪いことだとは思わない。あなたの言葉を借りれば、そういうのは法律なんかじゃ決まっていなくて、自分のルールで決めないといけない。分かりにくいかもしれないけど、オレはそう思うんだ」

細田さんも、オレも後に続ける言葉は無かった。言葉じゃ世界は回らない。行動が世界を回す。

頭の中のスクリーンでは、薄いゴムを介して、オレが京子さんの中で快樂に至っていた。

川の向こうには赤い建物が見える。古いレンガ造りの建物に見える。春の前の空は青さを取り戻しつつある。真昼の太陽を真上から受けても、その色はぼんやりと濁っていて、とても良い赤色だ。

何台ものパトカーが土手の上の道を赤いランプを点けて連ねていた。

細田さんからの領収書を取り出す。裏には、「ありがとう」とだけ汚い文字で書いてあった。細田さんは知っていたのだ。買出しの時に何かあったのかもしれない。いや、もしかすると、オレが逃げたのを確認してから自ら警察に連絡をしたのかもしれない。

今さら行ってみても、もう細田さんと話すこともできないだろう。それでも、オレはやっぱり橋の向こうに向かって歩いた。橋では誰にも会わなかった。川の水が冷たそうにひっそり流れているばかりだった。がけ崩れ注意の看板の横を通り、山と川の間を道路をてくてく歩いた。警官が何か言っているのが聞こえる。

これ以上行っても何も無い。ただ、細田さんが連れて行かれる姿があるだけに違い無かった。最後に何か言っておこうかとも思った。だが、それは細田さんにとってありがたいことか、いや、そうは思わない。そんなことをしたって野暮なだけだ。

オレは家に帰るべきなんだ。

学生は、ふらりと帰ってきた。捜索願も取り下げられた。

しかし、彼は理由を聞かれても適当にごまかすだけで、周りは苛立ったが、とにかく安心した。昔からの仲の深い友人が聞いても、やはりごまかすだけである。

騒ぎもしばらくすると止み、大学は始まった。元の通り、部活にも戻り、授業も受け、バイトも新しく始めた。学生らしい元の生活に彼は戻り、元通り普通の学生に戻った。

五月に入って、ゴールデンウィークの最後の日に、オレは京子さんに会った。携帯が壊れてから、連絡は取っていなかった。ぼんやりとギターで黒いオルフェを弾いているオレの部屋に、京子さんは入ってきた。細身のブルージーンズに、クリーム色のTシャツというシンプルな格好だった。

「すみません。携帯電話が壊れてしまつて、連絡が取れなかつたんです」

オレは新しい携帯電話を見せながら謝つた。事実だった。番号は変わっていないが、京子さんからも何も連絡して来なかった。オレも携帯電話が壊れていなくても、連絡しなかつたと思う。京子さんもそれ以上は追及しなかつた。

京子さんの分のコーヒーを沸かして、ターミネーターを回した。乗つたままになつていたら、キャノンボール・アダレイの *something else* が流れる。

「あの、ステレンスのカップ気に入つてたんじゃなかつたの？」

「携帯電話と一緒にこの前旅してるときに無くしちゃつて」

あのカップとガスコンロは今頃、警察にあるのかもしれない。分からない。

細田さんのことは新聞にも出ていた。新聞によると、殺人ではないが、過失致死というもので起訴されるらしい。包丁は細田さんが刺したとも、犯人が手元が狂つて自分で刺してしまつたとも確認はできなかったという。何せ、細田さん自身無我夢中で分かつていないし、目撃者もいなかった。何にせよ争っている内に刺さり、死に至つたのは間違いないので、そういう罪状になつたらしい。そして、その後の逃亡が公務執行妨害だとされたようだ。細田さんはオレのことを警察には言わなかつたようだ。もし、言っていたら、オレのところにも警察が来たはずだ。細田さんはオレの大学も知っていたのだから。

取調べは難航するに違いない。警察は、セックスが戦争を起こすと説明しても分からないだろう。だが、冷静に考えれば何と言うことは無い。細田さんを起訴する罪状は決まっているし、その成り行きもだいたい分かつている。セックスも戦争も関係なく上手く回っていく方法を世間は知っている。

京子さんは、新しくきちんとした仕事が見つかつたというようなことをしゃべっていた。オレは、うんうん、とその話を聞いた。彼女は別に怒っているようでもなかつたし、かと言つて久々の再会を喜ぶ風でも無かつた。淡々と最近のことを話して行き、オレはそれに相槌を打ち、時々自分の周りの最近のことも話した。

一時間ほどそうやつてどうでも良いようなことを二人で話した。どうでも良いようなことだつたがとても楽しく、その空気にオレはとても安心したような気持ちになつた。

それから、少しの静寂を置いて、彼女は言った。

「私ね、有意義に生きることにしたの。有意義かどうかは自分が決めるんですよ。それで、福田君と別れようと思って。付き合っていないのに、別れるってのもおかしいかもしれないけど、もう会わないようにしようと思うの。なんだか上手く言えなくてゴメンね」

言い切ると、彼女はそっとオレにキスをした。寂しかった。だが、正しいと思った。オレもまた少しの静寂を置いてから言った。

「有意義かどうかは自分が決めるか。そう、自分のルールは、自分で守らなくちゃいけないし、破るのも自分だよ。京子さんが自分でそう決めたんなら、そうするべきだと思う。寂しいことだけど、正しい事だと思うよ」

オレも彼女にキスを返した。

しばらく、コーヒーを飲みながらいつものように話をして、彼女は、やはりいつもと変わらないよう玄関に向かって行き、扉を開けて出て行った。最後に残った「さよなら」と言う言葉だけがいつもと違った。

一人残った部屋で、止まったレコードを裏返し、針を落とす。

「有意義に生きるに、さよならか」

部屋の隅に投げっぱなしにしていたメモ帳を取り上げ、そこから領収書を取り出し、机の引き出しの奥にしまい。ハイライトに火をつけた。

